

# 大友時代を 生きた人々

鹿毛 敏夫



薩摩島津氏の初代は、惟宗忠久といわれます。鎌倉時代初めの文治元(1185)年に、源頼朝の推挙で、近衛家領だった島津荘(宮崎・鹿児島両県にまたがる荘園)の下司職(現地実務を担う下級役人)に任じられたことで、九州との関係が始まりました。

その後の島津氏は、鎌倉幕府から薩摩国や大隅国などの守護に任じられ、室町時代には守護大名から戦国大名へと発展します。全盛期に

は九州のほぼ全土を軍事制圧しますが、全国統一を目指す豊臣秀吉を前に天正15(1587)年に降伏。関ヶ原の戦いを経た江戸時代には、外様大名屈指の家禄を持ち、幕末には討幕運動の中心勢力となって明治維新を推進したことは、周知の通りです。

その島津氏の第15代当主として活動したのが、島津貴久です。貴久が生きた16世紀前半の薩摩では、守護職継承を巡る家内抗争が激化し、一族

## 島津貴久



「太守島津貴久・聖師ザビエル会見の地」の石碑 (鹿児島県日置市)

## 薩摩掌握と大隅平定に力

の島津貴久らが没落します。一方貴久は、天文14(1545)年前後に伊集院(鹿児島県日置市)を本拠に守護とし、この実力を蓄積し、やがて同19(50)年に鹿児島に進出し、ちよつどの時期に、キリコ・ザビエルです。天文18(49)年に来航したザビエル

が貴久に謁見した地は、「鹿児島から5レグア(28キロ)離れたところ」と記録されています。伊集院を指すものでしょう。貴久の拠点伊集院の一字治城には、「太守島津貴久・聖師ザビエル会見の地」の石碑が建立されていますが、やがて貴久は、仏教界の圧力に押される形でキリスト教布教を禁止しました。

戦国期九州の政治動向の中での島津貴久の位置を考察した黒嶋敏氏(東京大)は、貴久とその16歳年下の大友義鎮(宗麟)の関係を、武家秩序の上でも、実態としても、大友家の方が格上だったと分析しています。「琉球王国と戦国大名」。例えば、大友義鎮が室町幕府から九州探題に

補任された永祿2(1559)年ごろ、日向国飫肥(宮崎県日南市)の支配を巡って伊東義祐と対立した貴久は、将軍足利義輝の和睦あつせん策の中、義鎮の裁定に従う意向を示しています。また貴久は、日向の支配権と引き換えに、大友氏からの支援を取り付けようとも画策していました。

島津貴久にとつての当面の課題は、薩摩の完全掌握と大隅の平定であり、両国内の反勢力と伊東氏の連携を断ち切るべく、上位権力と認められた大友氏や室町幕府との関係強化を進めていたといえるのです。

(名古屋学院大学国際文化学部教授)  
11月1回掲載